

---

# 我らのHS部

ピエロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

我らのHS部

### 【Nコード】

N8212Z

### 【作者名】

ピエロ

### 【あらすじ】

小学校 中学校 高等学校が一貫した結構大きな学園。そこに存在する妙な部活動『HS部』。

自由気ままな活動しかしていないと思われるそんな妙な部活に、高等部の新入生、伊丹 甲いたみいっはそんな部活ならまつたり出来るだろうと思入部する。

平凡で平和な、まつたりした生活をこよなく愛する甲だが、その部活の本当の活動を知り、その生活は大きく変わってしまう。

魔法使いを名乗る女の子、謎の天才科学者、リアル忍者、異世界か

ら来たというお姫様、複雑怪奇な顧問など・・・そんな彼らと  
共におくるちょっと変わった非日常ライフ。

ぶるるーぐ

春・・・

それは10代の男女なら誰しもが胸に期待を込める出会いと別れの季節。

空を見上げると雲一つない快晴、そんな空と宙に舞う桜の花びらは何とまあ風流なモノだなあと思う。

今日は入学式。

今日で俺も高校生の仲間入りさ。

受験に受かったのは結構有名な学園の『美星学園』という小学校中学校 高等学校が一貫した大きな学園だ。

田舎者の俺から見れば未知の世界だ。

入学式に向かうべく、桜並木の通りをのんびりと歩いていく。

俺と同じ新入生だと思われる人の姿は時間が早いせいかあまり見られない。

俺だつて別にいつも早起きしてるワケじゃないよ？ぶっちゃけて言うと、ガラでもなくウキウキしすぎて早起きしてしまっただけさ。だからまあ俺はこうしてのんびりと歩いているわけよ。

俺も色々と期待を胸に込めているが、一番の願いは平和な学園生活だ。

高校生活も平和でありますように・・・っと、心の中で願い事。

だが俺は思う、願い事なんてそうそう叶うわけないと。

だけど、それでもわずかな可能性に期待を込めて願うのが人間つてもものじゃないだろうか？

ま、どうでもいいか。

歩いていくこと数十分。

目の前には学園と校門と、その傍らの『新入生入学式』と達筆な字で書かれている置物。

ああ、死に物狂いで勉強した記憶が蘇ってくるぜ。

「・・・よし、行くか」

気合十分！俺は少し緊張気味で学園へと脚を踏み入れる。

おお、田舎学校とはどこか空気が違う気がするぜ！

それが最初に思った感想だ。

## 登場人物紹介

伊丹 甲（いたみこう）

高校一年生の新生で、本編の主人公的な存在。

好きな食べ物はカレー 嫌いな食べ物はアスパラとほうれん草、  
容姿は普通よりは上くらいのいたって普通な、大したとりえも見当たらない男子高校生。

団長（だんちょう）

高等部3年生で『HS部』の部長。

本名は岡田 英治（おかだえいじ）という名前だが、名前を言う  
と怒られるので皆団長という。

『HS部』最強の男で頼れる先輩。

気前の良さと美形な顔立ちが女性に人気だが本人には自覚がない。

望月 美鈴（もちづきみすず）

甲と同じく高等部の新生。

甲と同じクラスで、美人でスタイルもよく、優しくて料理が得意  
というまさに男性人から見れば理想のクラスの人気者の女性。

ジャニステイルク・ハイラルド・ウエルバー

高等部2年生の『HS部』の天才的科学家な男。

成績は全国？1という天才だが性格は面倒くさがりな怠け者。  
ジャニステイルク・ハイラルド・ウエルバーというのはただ自分  
が名乗っているだけで、本当の名前は刈部 秀介（かるべしゅうす  
け）

鳳 美香（おおとりみか）

小学校の頃から学園にいて、内部進学的高等部2年生の女性。  
本人曰く『魔法使い』らしい。  
静かな感じで、割と大人びた女性。

宗重 半蔵（むねしげはんぞう）

『HS部』の情報収集および情報処理担当の高等部2年生の男。  
時には天井から、時には掃除用具入れから、時には窓からと神出  
鬼没な隠密行動ならお任せあれなりリアル忍者。  
整った顔立ちにかなりの美声、いわゆるイケメンなのだがオタク  
ということであまりモテない。

ミルフィア・ミルス・ミルティリア

何の理由でか『HS部』に所属する貴族のお嬢様。  
本人曰く異世界からきた一国の姫だという、高等部の1年生。  
気品のある美しさと優しさが魅力的だと言われている。

ミスター・ジョージ

『HS部』に所属する中学部3年生の男。  
まったく当たらない出鱈目な推理を連発する自称名探偵。  
にぎやかなのが大好きなノリのいいヤツ。  
細い身体に似合わず腕っ節は強い。  
とあることが起きると人格の変わる多重人格者。

綾川 瑞希（あやかわみずき）

人見知りでやや引つ込み思案な中学部3年生。  
人の心が読めるというとんでも能力を持っているという『HS部』  
看板部員。

目元が髪で隠れていて、不思議な感じの女の子。

殿田 達也（とのだたつや）

甲と一緒に田舎から出てきて学園に入学した幼稚園からの付き合いの男。

運動神経はかなりよく、勉強の方も中の上で、いいヤツなのだが  
女性に目がなく、女性に関する情報収集能力は宗重をも凌駕する。

CR

刈部の作った人工知能のAI。

部室そのものがCRであり、様々な機能を兼ね備えた歌って踊れる人工知能。

第一話 題名？そんなの考えてないよ、題名なんてその場で思いついたものばっ

入学式を終え、俺は教室へと向かう。

俺のクラスは1年G組。クラスは全部で7クラス、A～G組みの7つだ。

ちなみにA～Dクラスはいわゆる特進クラス、バカみたいに頭のいいヤツの集まるクラスだ。

俺のいるクラスも含まれる、E～Gクラスはまあ平凡な、いたって普通のクラス。

普通が1番、そうじゃございませんかねえ？

教室に着くと、皆黙々と指定された席に着く。どうやら出席番号順に座るらしく、俺は同じみの1番右列の1番先頭だ。名前、『い』で始まるから。

まあ・・・慣れてるからいいけどね？それでも1番前の席つてのは俺にとってはあまり気持ちのいいもんじゃない。それが新学期なら尚更ね。

だがせめてもの救いは、救いって言うのか？俺の隣の席に昔からの馴染み、殿田がいることだ。

「なあ殿田」

「ん？どうした？」

隣の席に座り、チラチラと周りに視線をめぐらせている昔馴染み、殿田に声をかける。

新学期とあって今は皆基本無言だ。少なからず同じ中学校だった

のであろう人たちが話しているのが分かるが、その声は決して大きくない。

というか、こんな沈黙の空間で大声で話せるヤツがいたら見てみたいぜ。

ということで、殿田にかけた声も自然と小さくなってしまふ。

「俺さ、こういった沈黙苦手なんだよ・・・」

「知ってるさ、お前昔からそうだったからなあ」

「だからさ、どうにかしてくれよ」

「無茶言つなよ・・・さすがの俺でもそれはキツイぜ」

「だよなあ」

そんな取り留めのない話をしていると、ガラツと音を立てて閉まっていた教室の前扉が開く。

そこから20代前半くらいの女性の先生が入ってきた。

しかも結構美人、スタイルも中々・・・これは当たりか？

「おはようございます、今日からこのクラスの担任になります泉佐奈子です。1年間よろしくお願いしますね」

カツ、カツ、と小気味のよい音を立ててチョークで黒板に名前を書き、ニッコリ笑って一礼。

泉先生が、いい先生そうだ。

「それじゃあ皆も自己紹介してもらおうかな？」

そう言つて1番右列先頭の男子生徒を見てくる。  
すなわち、俺だ。

名字のせいが大抵そうなんだよな、こういう状況の自己紹介ってかなり緊張するのにそれが1番最初だぜ？加えて新学期、失敗することすら許されないとマジで処刑モンだろ！俺が何をしたつていうんだよ・・・っ！

「ええ〜とそれじゃあ伊丹君、お願いできますか？」

「あ、はい」

お願いできますか？つていうけど絶対に断れないよな。

俺は緊張気味な内心が表に出ないようにポーカーフェイスを心がけ、立ち上がる。

ワオ！視線が集まってくるぜ！

チラリと殿田を見るとニヤニヤしている。コイツ、後で殴つてやる。覚悟しとけよ？

「―――中学出身、伊丹 甲です。よろしく願ひします」

どうにか嘸まずに言えたぜ〜。心の中でガッツポーズ。

逸る気持ちを抑え、ゆっくりと腰を下ろす。ここまで来てやっと一安心。正直疲れたぜ・・・

「ありがとうございます〜、じゃあ次・・・」

その後は、殿田が普通の自己紹介をしたことに少し驚いたくらいしかなく、普通に自己紹介は進んでいった。

それから先生から明日の流れを聞き、今日は解散ということにな

った。

まあ新学期の初日なんてこんなモンだよな。

「あ、それから部活動の仮入部と見学はもう始まっていますので、皆さんもぜひ見ていってくださいね」

最後に先生はそう言って教室を出て行く。  
ふう〜何かから開放された気分だぜ。

「甲〜、お前どっか部活見に行くか？」

「いや〜、とくにないよ」

「お？マジで？じゃあちよつと付き合えよ」

「いいよ、何？また陸上部？」

「いや陸上はやめとく、もっと別なモンやりたいから」

「そつなのか？勿体ねえなあ〜」

カバンを取り、俺と殿田も教室を出る。

殿田は中学の頃、確か陸上で県大会準優勝したことがあったと思う。それを思うと陸上やんないのは勿体ないと思う。

まあ、本人がいいならいいか。

—————

まず向かったのはサッカー部。  
うん、やっぱりサブマ○ンシユートの超人技は無いんだね。ち  
よっぴり残念。

「殿田お前サッカーできんのか？」

「まあな、運動系全般はいけるぜ？」

「羨ましい限りで……」

殿田は昔から運動神経がよかった。それに比べて俺は、どちらか  
というとダメな方だ。その運動神経分けてくれよ！なんて殿田にむ  
かって何度思ったことか……、思い出だけで悲しくなる。  
そのくらいダメなのだ。

ああ……自分で言うと余計悲しくなってきた……

「じゃあサッカー部にすんの？」

「いやあ〜どうだろ？他も見に行こうぜ」

「りよ〜かい」

どうやらサッカー部は候補の1つらしい。  
いいよな、やりたいスポーツを選べるなんて。俺なんて出来るも  
のしか出来ないのによ。

次に向かったのはテニス部。

軟球なんて生易しいもんじゃない、硬球ボールを使った硬式テニスだ。当たると痛いんだっけ？あのボール。

とりあえず試合を見学させてくれるというので、試合を見学する。硬式テニス部は男女比率が3：7の割合で女性が多い。それが目当てで入る男子生徒も少なくないらしい。

もしかしてコイツもそうなのか？

そう思い、殿田を見てみると、やや鼻息を荒くして試合をしている女性の先輩の太ももを凝視している。

おいおいマジかよ、そんな理由で入部とか格好悪すぎね？

「殿田、お前テニス部にすんのか？」

「おう、決めたぜ、俺はこの部活に入る」

「さようございませるか・・・」

まあ入る理由なんて人それぞれだよな。俺がどうこう言うことじゃないか。

というワケで殿田の入部先が決まった。

—————

「甲はどこか見なくていいのか？」

テニス部を見に行くために外に出たので、その足で帰ろうとした俺に殿田は言う。

部活ねえ〜どうしましょうかあ〜

「お前運動苦手だから、やっぱり文化部か？」

「そつだな、多分そつなる」

「見に行かなくていいのか？」

「今日はいいよ、そのうち適当な部活見つけて入るから」

「そつか、じゃ帰るかあ〜」

「おつ」

そう言つて2人で帰り道を歩いていく。桜並木の通りは相変わらずキレイだなあと思う。

俺の隣にいるのがコイツじゃなくて、かわいい女の子だったらどんなに嬉しいことが。

「お前今『何で隣がコイツなんだよ？』とか思っただろ？」

あつ、バレた。

「それはお前もだろ？」

「へへ、よくお分かりで」

そんな取り留めのない会話をしながら家に帰る。

家は学園から徒歩30分の道のりだ。田舎から無理して来た俺と殿田には、自転車なんて文明の利器など持ってこれるはずもなく、

こっつして歩いている。

これから毎日これか・・・今からヤになっちゃうぜ。

それから歩き続けていくと家に着く。

家といっても家賃の安いボロアパートだ。俺と殿田はここに住んでいる。

俺が203号室 殿田が204号室 つまりお隣さんだ。

「じゃあな甲、夕飯になつたら呼んでくれ」

「はいはい、了解しました」

俺と殿田はお隣さんだし、仲もいいから基本一緒に飯を食っている。

食費はお互いで出し、料理は俺が作る。殿田は料理できねえからな、俺が作るハメになっている。

「さて、今日はカレーにすつか」

今日は記念すべき高校生活の初日。俺の好物、カレーを食ったって罰はあたらんだろ。

そう思い、食事の準備をする。

殿田と飯を食い、テレビを見ながら少し話をし、解散した後は風呂に入る。

まあ普通だよな。

それから寝る準備をして布団に潜り込む。

時間は11時。

普通の高校生なら寝るには早い時間だろうが、俺は別にすること

もないので寝る。

今日も1日、中々疲れた1日だったぜ。

## 第二話 睡眠は大事、でも夜更かしするのが現代っ子

半開きになったカーテンから光りが差し込み、その眩しさで目を覚ます。

時計を見ると午前5時21分。

普段よりも1時間近く早く起きてしまったらしい。

クソっ、何でカーテンちゃんと閉めなかつたんだろ、悔やまれるな。それにこんな早起きした時に限って目覚めがいい、はぁ・・・もう二度寝する気にならないし起きるか。

そう思い布団から這い出て、カーテンを全開に開く。

あぁ〜ちくしょう、太陽が眩しいぜ！

「飯作るか〜」

とにかくすることもないし飯を作る。今日の朝食は目玉焼きにサラダ。

目玉焼きは卵を焼くだけだし、サラダに限っては生野菜を洗うだけの簡単なものだ。

卵を焼き終え、野菜を洗い、ドレッシングを掛ければ朝食の完成。手を合わせていただきます。

自分で言うのもなんだけど、目玉焼きの焼き加減が絶妙でうまかった。

ものの数分で食べ終えた俺は食器を洗い、片付け、登校の準備をする。

家を出るときに時計をチェック。時間は午前6時30分。2日続

けて早めの登校だ。

――――

歩くこと30分。

とくに何も起きずに学校に着いた。まあ何か起きたら困るんだけどね。

時刻は午前7時。ちなみにこの学校の登校時間は8時30分までであり、7時に登校してくる人は中々いない。そんな静かな学校を、俺は歩いていく。

教室に着き、横スライド式のドアを開けて教室に入る。  
すると教室には1人の女の子がいた。

やや茶のかかった長い髪、俺よりは小柄だが制服越しからでも分かるスタイルのよい身体。って俺はいつたい何を見ているんだよ。

「えっと、おはようございます?」

何となく挨拶をするが、疑問形になってしまった。

そんな俺の挨拶に、むこうも「おはようございます」と返してくれた。何か女子に挨拶されるとそれだけで嬉しい。

「伊丹君はいつもこのくらい早いのか?」

「え?」

自分の机にカバンを置き、中身を整理しようとしたら声をかけられた。

突然のかけ声に、思わず気の抜けた返事をしてしまう。つうーかこの人、俺の名前知ってんだ。

ごめんなさい、俺君の名前知らないや。

「えっと、まあ偶々だよ偶々」

「そうなんですか？昨日も早く来てませんでした？」

そんなことを思って答えた言葉に、意外な言葉が返ってきた。何でこの人俺が昨日も早く来たこと知ってるんだろ？

「まあ昨日も早く来たけど、どうして？」

「私も早く来たから」

「そっか」

まあそうだよな。むこうも早く来ていたんなら、俺が視界に入ってたって不思議じゃないな。

「伊丹君は私のこと分かる？」

話は終わった。そう思いカバンの整理に戻ろうとした瞬間、声をかけられた。

しかも何の脈絡も無い質問だ。加えてそんな質問は俺には答えられない質問だった。

「ええ」と・・・

どうする・・・正直に言つか？それとも頑張って思い出すか？誤魔化すか？

いやいやどれも難しいぞ。正直に言つと怒られそうだし、思い出せる気しねえし、見た感じこの人には誤魔化しが効かない気がする。ああ・・・どうしよう・・・

「ごめん、分からない」

正直に言おう。

心にそう決め口を開く。

「そっか、じゃあ改めて、私は望月美鈴。貴方は伊丹甲君だよな？」

正直に言ったものの、彼女は嫌な顔も残念そうな顔もせず、改めて自己紹介をしてくれた。

この人、いい人だな〜と思う。

「うん、俺は伊丹甲。よろしくね」

「こちらこそ、1年間よろしくね」

ニッコリと微笑んで望月さんは言う。  
すげー、めっちゃ別嬪さんじゃん。

その後は皆が登校してくるまで少し会話をした。  
そこで1つ言おう。望月さんはめっちゃいい人だった。

――

「甲〱お前部活決めたかあ？」

「いや、決めてないよ」

今日はまだ授業はなく、学校についての説明やらのガイダンスを受けて終わり、気がつけば放課後。

放課後と言ってもまだまだ昼だけ。

「それより食堂に飯食いに行かない？」

「おおいね、さんせ〜い」

俺と殿田の昼食は基本学食だ。理由は簡単、弁当作るの面倒くさいし、作るために早起きするのはどうも気が進まない。

というわけで俺と殿田の昼食は学食なのだ。ハハハ、貧乏なのにね・・・

今日は先輩達も午後の授業が無いらしく、食堂は人でいっぱい、かなりにぎわっていた。

購買機のパンをめぐって騒いでいたり、食堂のおばちゃんに昼食を注文するべく長い列を作っては騒いでいる。

俺と殿田もその列に混じる。

並ぶこと十数分。やっと順番がきた。

「おばちゃん、牛丼頼みます」

「あ、俺はパスタ、ナポリタンで」

「はいよ〜」

それぞれ昼食を注文し、俺は牛丼を受け取ると席を捜すべく見回す。

う〜ん、どこも空いてなさそうだな・・・

そんな時。

「あつ、伊丹君、一緒に食べない？」

声をかけられた。

振り返ると長テーブルの端の方に望月さんがいて、小さく手を振っている。

「いいの？」

「もちろんよ、お隣どうぞ」

望月さんに招かれ、俺は望月さんの隣に、殿田は俺の正面に座る。

「伊丹君は今日は学食なの？」

「まあ、弁当作るの面倒くさいし」

「俺も俺も！弁当作るの面倒くさいから、多分これからずっと学食

だよ!」

「そうなんですか・・・」

やや興奮気味の殿田に、少々押され気味の望月さん。  
というか殿田、それ別に自慢できるモンじゃないぞ?

「殿田、お前は料理すら出来ないだろ?」

「え?あ、まあそうともいうな!」

何故か高テンションでいう殿田。コイツこうなると面倒くさいんだよな。

とりあえずそんな会話をしながら俺は牛丼を食べる。  
うん、うまい!おばちゃん、中々いい仕事するね。

「望月さんは部活とか決めたの?」

ナポリタンをすすりながら殿田が唐突に言う。コイツ部活の話好きだよな、まあ自分は運動出来るから自慢とかできちゃつまんな。それに比べて俺は・・・はあ・・・

「部活ですか?一応決めてるけど・・・」

「え?マジで!??何部にすんの!??」

おいおいそんながつつくなよ、望月さん困ってるよ?  
というか鼻息荒い・・・

「えっとHS部っていう部活なんだけど」

「H S部？」

殿田と声がハモった。あんまり気持ちのいいモンじゃないけど。

「甲、聞いたことあるか？」

「いや、あるわけないだろ」

「だよな〜望月さん、それってどんな部活なの？」

まあ当然の疑問だよな、俺も思ったもん。

「H S部は・・・まあ文化部の1つなんだけどね、ちょっとした娯楽部みたいなのかな？」

微妙にはにかんで望月さんは言う。

それにしてもちよつとした娯楽部か・・・のんびり出来そうだな。

「甲、お前入るのか？」

俺の考えを察したのか、殿田が尋ねてきた。ホントに妙なところで鋭いよな、コイツ。

「まあな、だつてのんびり出来そうじゃん？」

「はは、お前らしいや」

「伊丹君も入るの!？」

「うん、今決めた」

「本当！？じゃあ早速入部届けだしに行こうよ！」

「お、おう？」

答えた途端、俺は望月さんに手を掴まれ、望月さんは走り出した。いきなりのこととて転びそうになったが、何とか体勢を立て直して俺も一緒に走り出す。

それから職員室に向かい、入部届けを2枚もらう。それに希望の部活と自分の名を署名し今度は別の建物に向かう。

向かった先は通称部活棟。文化部や運動部の部室は全てここにあるという大きな建物だ。

俺がいるのはその棟の最上階、目の前には横スライド式のドアと『HS部』と達筆に書かれた看板がある。

その時はまだ知らなかった。

この入部届けのせいで俺の日常が変わっていくことを……………

### 第三話 人は見かけによらない、これは本当だと思う

今俺は部活棟という全ての部活の部室が集まる場所の、最上階にいる。

目の前には『HS部』と達筆な字で書かれた看板があり、『HS部』部室のドアがある。

望月さんはドアを軽くノックする。するとドアがすすつと開かれた。

「おじゃまします」

「お、おじゃまします・・・」

部屋に足を踏み入れると、そこには部室とは思えない光景が広がっていた。

部屋の中はかなり広く、奥には立派な机と立派なイスがあり、その脇に見たこともない印の旗がある。中央にはテーブル、それを挟む長めのソファが2つ。右の壁側には食器棚やティーセット、左には本棚。それから両サイドにドアがあるのを見ると、まだ部屋があるみたいだ。

部室って言うより、家って感じだよな。

部室の中には誰もいなかった。

あれ？じゃあ誰がドアを開けたんだ？

「誰かいないんですか？」

望月さんが、呼びかける。

しかしその声に答えたのは人ではなく機械音だった。

『こんにちは、何か御用ですか？』

どこからともなく聞こえる機会音。

いったいどこにいるんだ！？どこから声が出てるんだ！？

「私たちは入部希望で来たんです」

俺が戸惑ってる中、望月さんが俺みたいに戸惑った様子もなく言う。

望月さんはすごいな、俺には無理だ。

『そうでしたか、ではそのソファアにでも掛けていてください。まだ誰も来ていないので』

「分かりました」

望月さんは言われたとおり、中央にあるソファアに腰を掛ける。

「伊丹君は座らないの？」

「え？あ、座る」

望月さんに言われ、俺もソファアに腰を下ろす。中々ふかふかなソファアだ。

それから数十分ほど待つと部室のドアが開かれた。

「お？客人か？」

「みたいですね」

そういつて2人の人が入ってきた。

1人は女性で身長的には普通くらいの身長で、長い黒い髪がキレイな女性だ。

もう1人は男性。俺よりも身長が高く、かなりのイケメンだった。

「美香副部長、お茶の用意をしてくれたまえ」

「分かりました」

そういつて女性の方は手前のドアから別の部屋に姿を消す。

一方男の方はカバンを適当なところに置き、俺達の向かい側のソファ―に腰を下ろした。

「我らがHS部にようこそ、今日はどいつた用件かね？」

「私たち、入部希望できました」

男の人の問いに、望月さんは落ち着いた様子で答える。ちなみに俺は緊張して話すことなんて出来ない状態だ。

「おお入部希望者か！それは嬉しい限りだ」

本当に嬉しそうに男の人は言う。

「そういえば紹介がまだだったな、俺はこの部の部長であり団長だ」

「だ、団長ですか？」

「うむ、団長だ」

しばらくの沈黙――

というか、自己紹介で名前を名乗らないで団長と名乗る人間を始めてみたぞ？さすがの望月さんも戸惑っているじゃないか。

「君たちは？」

沈黙を破ったのは団長さんの言葉。

「私は望月美鈴っています」

「お、俺は伊丹甲です」

「望月君に伊丹君か。よし！君たちは入部希望者だったのだな、入部届けは持ってきているか？」

「はい、こちらに」

団長さんの問いに、望月さんは短く答えて俺の入部届けと一緒に団長さんに渡す。

団長さんはそれを受け取ると、奥にある立派な机まで歩いて行って引き出しを開けて何かを取り出す。取り出した何かの蓋をとり、入部届けに押し付けているのを見ると恐らく判子だろう。

「よし！これで君たちもこの部の部員だ。これからよろしくな、望月部員、伊丹部員」

「こちらこそ、よろしく願います！」

「お、お願いします」

と、いうわけで今日という日の午後1時30分頃、俺は妙な部活『HS部』の部員となった。

嬉しいのか、そうでないのか・・・はたまた微妙な気分だ。そんな俺に比べて、望月さんはとても嬉しそうだ。

何だろうね、この違いは。

「お茶がはいましたよ」

そう言って現れたのは先ほど別の部屋に消えた女性だ。

その手に持ったお盆の上には湯飲みが4つあり、それら全てから湯気が立っている。熱そうだ・・・

「すまないな、美香副部长。こちらは今部員になった新人部員、望月君と伊丹君だ」

「こんにちは、わたしは鳳美香といいます、よろしくね」

微笑みながらそう言われた俺は、少し胸が高鳴ったのが分かった。ヤバイ、すごい美人だ。

「伊丹甲です、よろしくお願いします」

「望月美鈴です、お願いします」

挨拶をし、湯飲みを受け取る。湯飲みの中は恐らく緑茶だ。緑茶をすすりながら、他の部員が来るのを待った。

熱・・・っ！

――

『――連絡が入りました』

他の部員が来るのを待つこと数十分。またしても機械音が聞こえた。

「そういえば団長さん、この機械音は何ですか？」

「これか？これは部員の1人が作った人工知能のA I『C R』だ」

「A I？」

「そうだ、自らでモノを考え、学習し成長していくプログラム。それがA Iだ」

「そんなモノを作ったんですか・・・すごいですね」

『団長、連絡が入ったといったのが聞こえなかったのですか？』

俺が団長さんと話しているとまたしても機械音が部屋に響いた。団長さんは「すまない」と一言言って、用件を聞く。

「どうやら我が父とジョージさんが今日は来ないみたいですね」

「うむ、了解した」

今の話からすると、どうやら部員の2人が今日は来ないらしい。  
少し残念だ。

そんなことを思っているとドアが開いた。

「遅くなったでござる」

「お、遅くなってすみません」

入ってきたのは2人。1人は歴史を感じる口調の男。

もう1人は女性で、小柄で目元が髪で見えないおどおどした感じの女の子だ。

ここまでできた思った。この部活の部員はかなり個性的な人ばかりだ。

この2人はどんな人なんだろうか？

知らないうちに俺はそんな期待をしていた。

#### 第四話 野菜は万能な食材だ

遅れて入ってきた2人は、団長さんがカバンを置いたところにま  
とめて自分のカバンを置き、男性の方は団長さんの隣に腰を下ろし、  
女性の方は後ろに立つ鳳先輩のやや斜め後ろに立つ。

「宗重部員、綾川部員、この2人は新入部員の望月君と伊丹君だ」

「ほほう、新学期2日目にいきなり新入部員とは。珍しいこともあ  
るのでござるな」

団長さんの言葉に、団長さんの隣に座る男性が嬉しそうな声で言  
う。

この人の喋り方は、何というかくこうく、古いつて言うの？歴史  
を感じちゃう喋り方だ。それに今時「ござる」は珍しい、というか  
ぶっっちゃけ無いだろ・・・

「自分は宗重半蔵と申す。新入部員殿、よろしく頼むでござる」

「わ、わたし・・・っ、綾川、瑞希・・・です」

「伊丹甲です、よろしくお願ひします」

「望月美鈴です、よろしくお願ひします」

宗重半蔵先輩。なんていうかサムライっぽい、いや、どちらかと  
いうと忍者っぽい名前だな。だからこそこの喋り方なのか？キヤ  
ラが濃いぞ、この先輩。

一方の綾川先輩？いや、小柄だし、少しおどおどした感じからだ

と後輩にも見えるぞ？とかいいつつ本当は同い年？なあ〜んて見せかけて実は先輩か！？

むむむ・・・分からないぞ・・・？

「わたし・・・15歳、です。こ、後輩・・・です」

俺の考えてることが分かったのか、綾川さんは教えてくれた。

と、いいですか何？俺って実は考えていることが顔に出ちゃうタイプの人間なのか？まあいいや、それにしても15歳か、こんな可愛らしい後輩なら大歓迎だな。

「よろしくね、綾川さん」

「こ、こちらこそ・・・よろしく・・・です」

鳳先輩の後ろに隠れるようだが、丁寧にも頭を下げて言葉を返してくれた。礼儀正しい子だな。

それからは少し話をし、「詳しいことは明日話す、遅れずに来るように」「との団長さんの言葉により、俺と望月さんは帰ることになった。

それにしても自分自身でもビックリだ。まさか入学2日目に部活に入るなんてさ。

-----

「面白そうな人達だったね」

帰り道。時間は2時30分頃くらいかな？

桜並木の通りを、俺と望月さんは歩いている。俺は歩きだが、望月さんは電車で学園に通っているらしく、2人で向かっている先は学園から徒歩で大体15分程度の微妙な道のりの駅だ。

「うん、伊丹君もそう思った？」

「まあね、最初は緊張とかしたし、人工知能なんかには驚いたけどいい人そうであつたよ」

「ははは、実は私も緊張してたんだよ？」

「マジで？全然分からなかつたよ」

「出来るだけ表に出ないようにしてたから」

笑いながら望月さんは言う。

笑顔の望月さんも可愛かつた。

「部活の活動とか分からないけど、面白そうな部活であつた」

「そうだね」

この桜並木の通りを女子と、しかもその女子が望月さんとかかなりの美人なのに気の利いたことが言えない自分が悔しい。

それでもいいもんだな、こういうのも、楽しいや。

そんな他愛の無い会話をしていると駅に着いた。

どうやら楽しい時間を過ごしていると、時間の流れが速く感じる。というのは強ち間違いないらしい。だって俺の中じゃ15分の道のりが5分くらいにしか感じなかったし。

「それじゃあね、望月さん」

「うん、伊丹君も気をつけてね」

駅の入り口でそう言い、俺は歩き出す。

「また明日ね！伊丹君！」

そんな声が聞こえ、歩きながら振り返ると、望月さんが手を振っていた。俺も小さく手を振り、そのまま歩いていく。

俺の住んでいるアパートに着くと、階段のところで俺の友人ことお隣さんの殿田が仁王立ちしていた。な、何だ……？

「甲、今までどこほつつき歩いていた！」

「は？別に、入部届けだして少し話してただけだけど？」

「この人でなし野朗！俺があの後、食堂で1人悲しく飯を食ってた悲しみが分かるか！？」

「ああああ……それはごめん」

「許して欲しいなら今晚の夕飯、焼きそばにしる！」

「はいはい、分かったよ」

コイツはこうなるとかなり面倒くさい。昔からそうだった。それが焼きそば1つで機嫌が直るんだ、よしとしておこうじゃないか。

さて、そんじゃ夕方にも買い物に行くか。

夕方。近くにあるスーパーへと向かう。

このスーパーは結構大きく、品揃えもいいしアパートからも近いと俺にとってはパラダイスなスーパー。まさに庶民の味方だ。

焼きそばの麺は家があるので、野菜売り場へと足を運ぶ。

するとそこに見知った人がいた。知り合ったばかりの鳳先輩だ。

「こんにちは」

「え？あ、こんにちは」

2つのにんじんを手に取り、にんじんと睨めっこしていた鳳先輩はやや驚いた声でいう。

制服姿なのを見ると、どうやら学校帰りらしい。

「先輩はこの辺りに住んでるんですか？」

「はい、そうですよ。伊丹さんもですか？」

「ええ、そうですけど。先輩、俺は後輩なんで敬語はよしてくださいよ」

「そうですか？気をつけますね」

ニツコリと微笑んで鳳先輩は言う。この様子だと、これからも敬語な気がするけど。

「先輩は自分で夕食を作っているんですか？」

「はい、一人暮らしですから」

「そなんですか？意外ですね」

本当に意外だ。鳳先輩も、俺や殿田みたいに田舎から来たのかな？それとも何か事情があるのか？

まあそんな事を平気で聞くほど俺もバカじゃないので、余計な詮索はしないでおこう。

「それじゃ先輩、俺行きますね。邪魔してすいませんでした」

「いえ、そんなことないですよ。気をつけてくださいね？」

「はい、ありがとうございます」

鳳先輩に一礼して、目的の野菜をカゴに入れ、俺はレジへと向かう。

あまり見ずにカゴに入れた野菜だが、中々新鮮そうで色のよい野菜だった。ちよっとだけ得した気分。

アパートに戻り、少しのんびりしては夕食の準備をする。

出来上がった頃に、タイミングを見計らったがごとく現れた殿田に驚きながら、部屋に入れ、テレビを見たり話をしながら夕食の焼

きそばを食べる。自分で言うものなんだが、中々よい味付けだった。望月さんと一緒に帰ったことや、鳳先輩や綾川さんのことを話したら、殿田が悔しそうな顔をし、睨みつけてきたのは言うまでも無い。

夕食が終われば俺は風呂に入り、就寝の準備をする。  
今日も1日お疲れ様でした~~~~と。

## 第五話 モノにはそれ相応の適量というものがあるもんだと思う

今日で入学から3日目。

今日から授業も始まり、高校生活も本格的なものに近くなってきた。で、まあ今日は授業があるのだが、最初の授業ということでは教科の先生に何度目かの自己紹介するのと、その教科の授業の1年間の流れについての説明をするだけで終わることとなった。

まあ最初はこんなもんだよな。

そんな感じで1日が進み、今はもう1日の半分以上を過ぎた夕方の4時。つまり放課後だ。

俺は今日から部活を始める殿田に軽く「頑張れ」と一言残し、望月さんと一緒に部活棟の最上階に向かう。ちなみに部活棟にはエレベーターがあるのでわざわざ階段を上る必要がない。嬉しい限りだ。

「失礼します」

「失礼します・・・」

望月さんの後に続き、部屋に入ると昨日の4人を含めて、もう2人見知らぬ人がいた。誰だろうか？

1人は白衣を着て四角つぽいメガネを掛けていて、ややだるさも見受けられそうだがキリっとした目の男の人。外見から見れば科学者って感じた。

もう1人は普通な感じの男性だが、首のところに赤い蝶ネクタイといかにも改造されていますよといわんばかりの上履きを履いている。腕には腕時計。ワザとらしくはねた髪の毛。サッカーボールの出しそうなベルト。白々しくレンズのところを何かを写しているメガネ。紺のブレザーが青くなっていたらまさしく名探偵○ナンにでも成れ

そんな男だ。

「うむ、よく来たな。まあそのソファ―に腰を掛けたまえ」

奥の、かなり立派な机に座る団長さんが言う。机に両肘を突き、口の前で手を組んでいるその様子はすごく様になっている。

団長さんの言葉に従い、俺と望月さんは中央に並ぶソファ―に座る。

ちなみに向かい側には宗重先輩、綾川さん、○ナン気取りの男性が座っている。鳳先輩は団長さんの脇に立ち、静かに微笑み。白衣の人は別の部屋からでも持ち出したであろうイスに座っている。

「とりあえず紹介しとこう。こっちの白衣の男は刈部秀介。我が部の頭脳だ」

「新入部員さん、私のことはジャニスティルク・ハイラルド・ウェルバーと呼んでくれたまえ」

「は、はあ……」

立ち上がり、右手を曲げ、腰を折り、礼儀正しくお辞儀をする白衣の男。ジャニスティルク・ハイラルド・ウェルバー？先輩？めっちゃ呼びにくいんだけど……

「伊丹君に望月君、この長ったらしい名前は刈部科学者が自ら名乗っているだけだ。気にすることはないぞ」

「そうですか……」

まあ団長さんがそう言うんだ、普通に刈部先輩でいいだろう。刈

部先輩は心なしか悲しそうな顔をしていたけど。

「続いてこちら。この男はミスター・ジョージ部員だ」

「こんにちは先輩。ジョージっす。よろしく頼むっす」

ペコペコと頭を下げてくるのはジョージと名乗った男。人当たりもよさそうで、中々印象的にはいい人だ。言葉から察するに後輩なのだろう。

「伊丹です、よろしくお願いします」

「望月です、よろしくお願いします」

とりあえず無難な挨拶をする。これでとりあえず部員全員とは挨拶したことになったと思う。

「よし。では早速君達には説明をしよう。この部活動がどんな部活なのか・・・」

話を切り替えるように団長さんが声を放つ。

それから一泊間を置いて、団長さんの口が開かれる。

「君達はこの部活がどんなものか知っているかね？」

「えっと・・・まったりと過ごす部活ですか？」

団長さんからそんな質問をされ、戸惑いながらも俺はそう答える。だって望月さんの話じゃそうい部活だって聞いたし。

が、俺の答えに団長さんは少し残念そうな顔をし、脇に立つ鳳先輩は微笑んでいる。

え？何？俺何か間違えたの？

「望月君、君は知っているかね？」

「はい。確か学園の生徒の助けになることをする活動ですよね？」

「ふむ・・・正解だ」

望月さんの答えにやや満足した様子の団長さんが言う。

あれ？俺の聞いたのと少し違くない？まったりするんじゃないの？

「伊丹君。確かに君の言うこともあながち間違っではない」

「どつという意味ですか？」

「この部活は学園の生徒の助けをする。それが活動内容だ。が、やる事がない時は君の言ったようにまったりしている。それがこの部活、『HS部』だ」

なるほど・・・

まあそれなりの活動もあるが、まったりもする部活か。

それなら生徒の助けになることなんてあんまりないと思うし、基本はまったり出来そうだな。俺はなんていい部活を見つけたんだ・・・！

それから何をすればいいのか説明を受けたところで、団長さんがふう〜と息をついて口を開く。

「と、まあ活動内容も分かってもらえたことだし早速活動に取り掛かるわけではないか。美香副部長、依頼書を」

「はい、どうぞ」

そういつて団長さんが鳳先輩から受け取ったのは、辞書と同じくらいに積み重なった紙の束。

まさかアレ全部が生徒からの助けを求める声だというのか……っ!?

「では望月君、伊丹君。活動に取り掛かってくれたまえ!」

「はいっ!」

「は、はい……」

やる気満々の望月さんとは比べ、あまりの量の多さにがっくり肩を落とす俺。

そんな中、初めての俺の『HS部』の活動が始まった。

## 第六話 なくしたものって忘れたり必要がなくなったところによく見つかるよね

各自がそれぞれ適当な枚数依頼書を受け取り、活動を始める。

俺も何枚か依頼書を受け取り、ソファーに腰を下ろして依頼書に目を通す。

何をすればいいのかといえば、まず依頼書の内容を確認。その依頼が受けるべき依頼かを判断。次にその依頼が危険なものか危険じゃないものかを判断し、S～Dまでのランク付け。

Sランク：最上級危険依頼

Aランク：危険依頼

Bランク：危険そうで危険ではない、だがしかしどことなく危険を感じる依頼

Cランク：普通依頼

Dランク：安全依頼

と、こうなっている。Bランクの危険さが全然分らないんだけど・・・

宗重先輩曰く Bランクでランク付けしなくてよいらしい。じやあなんで作ったんだよ。

まあそういったランク付けをし、ランクごとに依頼書を分けてまとめる。その次はそれぞれの依頼を誰が担当するかを決める。それが済んだら行動開始。そういった流れだ。

俺はまだ1年生で新入部員なので、慣れるまではこういった仕事と他の先輩についていって一緒に仕事をするということになっている。

「伊丹殿、今日は自分と仕事でござるよ」

依頼書を仕分けしていると、仕分けを終えた宗重先輩に声をかけられた。

宗重先輩の言うとおり、今日は宗重先輩と一緒に仕事をするのだ。団長さんの指示で、日替わりで色々な人と仕事をする事になったのだ。他の人と親睦を深めるためだとか。まあ俺としてもそうしてくれる方がありがたいことには変わらない。

「もう仕分けが終わったんですか？」

「うむ、このくらい造作も無いでござるよ」

さすがは先輩、仕事が速い。俺が十数枚程度なのに先輩の枚数はざっと見ても四十枚くらいはあつたはずだ。

「大丈夫でござるよ、自分も初めは中々出来なかったござる。とくにランク付けの基準が分かりづらくて困ったでござるなあ」

この先輩分かつてる！！

そうなんだよな。ランク付けの基準は一応あるのだが、それでもどんな依頼がどのランクなのかかなり分かりづらい。

「まあ伊丹殿、自分の仕事は後回しにして自分と行くでござるよ」

「分かりました」

とりあえず自分の目を通す依頼書をテーブルの隅に置き、宗重先輩について行く。

ちなみに望月さんは鳳先輩と一緒に仕事に行っているようだった。

――

「どこに行くんですか？」

校舎の廊下で、前を歩く宗重先輩に俺は尋ねる。

「校舎3階、2年B組、自分の教室でござる」

B組つてことは特進クラスじゃん！？マジで？この先輩頭良かったの！？」

「む、伊丹殿。今自分のことを下に見てたでござるなっ！？」

「え、いや、そんなことないですよ」

「むむ・・・」

宗重先輩はばつが悪そうな顔をしながら前を向き直る。

いやあくそれにしても人って見かけによらないんだね、今それを知ったよ。だって「ござる」なんて言ってる人が頭いいと普通思う？俺は思わないね。

そんなことを思いながら歩いていると、2年B組。宗重先輩のいるクラスに着いた。

「ここがござる」

ガラツと教室のドアを開け、先輩の教室に入る。  
すると教室の中に1人の女子の先輩が奥の席に座っていた。

「あの人はい？」

「今回の依頼人。2年B組吹奏楽部、朝宮静香殿でございます。」

教えてもらっていると、朝宮先輩がこちらに小走りに歩み寄って来た。

「宗重君。頼み、受けてくれたんだ」

「宗重半蔵。自分が今回、朝宮殿の依頼を担当することになった者でございます。よろしいでございますか？」

「はい、よろしく申し上げます」

朝宮先輩に宗重先輩が軽くお辞儀をし、ポケットから何やらカードみたいな物を取り出し、それを見せて言う。

「あの、そちらの人は？」

「む？ああ、こちらは新入部員の伊丹甲部員でございます」

「伊丹甲です、よろしく申し上げます」

「こちらこそ、新入部員さん。よろしく申し上げますね」

ニコリと微笑み、手を差し出す朝宮先輩。

たぶん握手でもするのだろうと思ひ、俺も手を取り、軽く握手する。・・・あつ、柔らかい。

「では朝宮殿、詳しい内容を教えてくれるでござらぬか？」

「あ、はい・・・実は・・・」

話を切り出すように宗重先輩がいい、朝宮さんが依頼内容を話す。

依頼内容は、どうやら吹奏楽部で使っている自分の楽器がなくなつてしまつたらしく、それを探してほしいとの事だ。

「ふむ、では朝宮殿のその楽器とは何でござるか？」

「フルートです」

「なくなつたのはいつでござるか？」

「えつと・・・2日くらい前です」

「どこでなくしたか、分かるでござるか？」

「はい。吹奏楽部はいつも音楽室で活動してて、楽器も音楽室に置きっぱなしにしてるんです」

「ふむ・・・」

「それで、2日前の日と同じように音楽室に行ったら、なくなつていたんです・・・」

「そつでござるか……、了解したでござる。すぐにも探し出してみせるでござるよ」

「……ありがとうございます！」

話が終わり、早速搜索開始となった。

時間は午後4時47分。今からだとも1時間は探せるはずだ。

「先輩、この依頼はランク的にはいくつですか？」

朝宮先輩と別れ、廊下を歩きながら俺は宗重先輩に尋ねる。

「ランク的にはCランクでござる」

「普通ですね」

「まあ、探し物でござるからな」

「それにしても先輩。どこに行くつもりですか？」

「とりあえず音楽室に向かうでござるよ、そこで情報収集でござる」

「分かりました」

情報収集といっても、ぶっちゃけ俺は見つけることは絶望的だと思っ。

普通に考えてフルートがなくなることで自体がまずないことだと思う。「消しゴムがなくなった」なんてレベルとはまったく違うなくものだ。なくなったというよりは盗まれたと考えるべきだと俺は

思う。

盗まれたものを見つけるのはかなり困難だ、それは消しゴムにしろ自転車にしろ金にしろすべてにおいてね。

宗重先輩はそれをどう見つけるのだろうか？

そう物思いに耽っていると音楽室に到着。

ドア越しからでも楽器を鳴らす音が聞こえる。

そんな中、宗重先輩は何の躊躇も無く音楽室のドアを開ける。

その瞬間音楽室の中が瞬く間に静まりかえり、一斉に視線が俺達に降りかかる。うわっ……！かなり辛い！

「失礼するでござる。」

そんな降りかかる視線を物ともせず音楽室に入っていく宗重先輩。俺はそんな宗重先輩の後ろに出来るだけ隠れるようにしながら、とりあえず一礼して音楽室に入る。

「あの……『HS部』の方ですよ？何の御用でしょうか？」

ブレザーについているバッチの色が青。つまり3年生の先輩が声をかけてきた。

ちなみに緑が2年生。赤が1年生だ。

「『HS部』の宗重半蔵と申す。朝宮殿のフルートがなくなった件について調査にきたでござるが、少し見回ってもよろしいでござるか？」

ブレザーのポケットから朝宮先輩にも見せたカードみたいなものを出し、それを見せて宗重先輩が言う。

「はい、大丈夫です。どうぞ」

3年生の先輩に連れられ、音楽室の空いている窓側の空間にイスを用意されていたのでそこに宗重先輩が腰を下ろす。俺もそれに少し遅れて腰を下ろす。

「朝宮さんのフルート、見つかるでしょうか・・・？」

心配したような声で3年生の先輩がいう。

「安心するでござる。自分が必ず見つけ出してみせるでござるから」

「私からも、よろしくお願いします」

3年生の先輩が宗重先輩に頭を下げる。

頭を下げてまでお願いするなんて、それほどまでに『HS部』は信頼されていて頼れる部活ということなのだろうか。不思議だ。

「任されたでござる」

それに応えるように宗重先輩は言う。その声には確かな確信と自身が混じっていた。

そんな宗重先輩の様子に安心した様子をみせ、3年生の先輩が他の部員に声をかけ、練習が再開した。さっきの先輩、吹奏楽部の部長だったんだ。

それから練習が再開されてから終わるまで、宗重先輩は口を開かず、ずっと練習の様子を見続けていた。

## 第七話 営業スマイルって便利なモノだよな 最近そう思う

吹奏楽部の練習が終わり、今日はもう音楽室に要がないのか、俺と宗重先輩は片付けを始める部員を横目に音楽室をあとにする。

それから鞆を取りに行くべく『HS部』のある部活棟の最上階に向かう。

「先輩、何か分かったことはあったんですか？」

歩きながら、俺はずっと練習の様子を見ていた宗重先輩に聞く。

俺は練習の様子を見ていても何も分からなかったけど、宗重先輩は何か分かったことがあったのだろうか？

「うむ。分かったことはあったでござるよ」

「ホントですか？・・・え、何が分かったんですか？」

「ふっ、内緒でござる」

「ええ~~~~~」

「何が分かったかは自分で考えてみるでござるといい。宿題でござるよ」

悪戯な感じが混ざったような笑みを浮かべて言う宗重先輩。元の顔がまあカッコいいから女性なら多少はドキリとかするんじゃないかもしれないが、俺は男だ。ぶっちゃけていうとやめてくれって感じだった。もちろん口にはしないけど・・・

「まあ、分かりました」

とりあえず了解しとこう。確かに自分で考えるのも大事だし。そんなことを話しながら歩いてみると、あっという間に部室に着く。横スライド式のドアを開け、部室の中に入る。すると中には刈部先輩しかいなかった。

「宗重君に伊丹君か。君達が最後だよ」

「そつでござったか」

刈部先輩の言葉に俺は時計を見て確認してみると、時間は午後6時5分。最終下校時間が6時30分のこの学校では、帰っていてもおかしくない時間だった。

「では自分達も帰るでござるか。伊丹殿、帰るでござるよ」

「え、あつ、はい」

カバンを持ち、中身を確認しては変える準備を終え、宗重先輩と部室を出る。

「さようなら」

『さようなら』

「うむ。失礼するでござる」

「お先に失礼します」

出る際に刈部先輩とA IのCRさん？に挨拶する。そして宗重先輩と一緒に部活棟を出て行く。

「先輩。刈部先輩はまだ帰らないんですか？」

歩きながら、宗重先輩にふと思った疑問も口にする。

「おや？知らなかったでござるか？刈部殿は部室で生活してるのでござるよ」

「えっ!？」

「部室には他にも部屋があるのでござろう？その1つが刈部殿の研究室なんでござるよ」

確かに『HS部』の四角形の部室の各角にはドアがある。入り口から近い右のドアの部屋は鳳先輩がお湯を沸かしていたのを見るとたぶん給湯室かなんかだと思うが、他の3部屋は何の部屋か分からなかった。

その一部屋がまさか刈部先輩の研究室だったとは驚きだ。科学者みたいななりだと思っただが、本当に科学者だったのもやや驚きだった。てつきり自称かなんかだと思っただけで、どうやら違ってみただ。

「刈部殿はそこで生活して居るでござる。部活棟には運動部のためにシャワーもあるでござるし、学園側からも許可が出ているでござるから気にすることは無いでござるよ」

「そうなんですか。なんか・・・すごいですね」

「はは、皆そつ言つてござるな」

楽しそうにいう宗重先輩。

そんな宗重先輩と話しながら帰り道を歩いていき、学園から徒歩15分の場所にある駅に歩きつく。

宗重先輩も学園には電車で通学しているらしく、駅もこの駅だ。

「では伊丹殿。気をつけて帰るでござるよ」

「はい、ありがとうございます。先輩もお気をつけて」

「ふっ、心配は無用でござるよ」

そついつて先輩は駅の中に消えていく。

俺はそれを見送り、見送り終えては家に向けて歩き出す。

「・・・あつ、買い物しなくちゃ」

やっぱりスーパーに向けて歩き出した俺であった。

-----

スーパーで豚肉とシヨウガを買う。今日は豚のシヨウガ焼きだ。

あとはキャベツ、キュウリ、トマトとサラダにする野菜を適当に買い、お茶っ葉を切らしていたのを思い出し、お茶っ葉を買う。あ

とは大きめのボトルで水を買ってレジに向かう。

「776円になりまあす」

にこやかに微笑みながら言うレジ打ちの女性定員に、俺は野口を1体生け贄に捧げ、224円のおつりを受け取る。

「ありがとうございましたあ」

そんな声を受けながら、俺はスーパーを後にする。

アパートに戻り、適当に服を脱ぎ捨て、時間を確認。

時間は午後6時57分。約7時だ。

とりあえず夕食の準備に取り掛かり、数十分後には完成させる。

「あつ、ヤベ。ご飯炊いてねえや」

急ぎご飯を炊き、炊いている間に風呂を洗い、お湯を入れる。

風呂を洗い終えて、お湯を入れた頃にいきなりインターホンが部屋に鳴り響いた。

「うわっ、もうこんな時間かよ」

時計を見てみると時間は7時49分。

殿田が来てもおかしくない時間だった。

とりあえず家にあがってもらおうと思い、扉を開けると殿田と一緒に意外な人物がいたのだった。

**第七話 営業スマイルって便利なモノだよな 最近そう思う(後書き)**

あけましておめでとございませう  
今年もよろしくお願いします

こんな小説でも少しでも皆様の暇をつぶせたらいいなと思います

第八話 日に干したあとの布団はどうしてあんなに気持ち良いんだろうか

扉を開けると、殿田がいた。

そしてもう1人、女の子がいた。

「ういゝす甲。飯食いにきたぞ〜」

「こんばんわ〜。お兄ちゃん、きちやった」

外野のもう1人の声を意図的に無視し、俺は殿田に言葉を返す。

「ごめん殿田。まだ飯炊けてねえや」

「あは、構わねえよ。とりあえず部屋に入れてくれよ」

「おう、いいよ」

とりあえず殿田を家に招きいれる。

そしてそのまま扉を閉め、お外の世界とさようなら。心の中で手を振る。

「おい・・・いいのか?」

居間の木のテーブルの前に胡坐をかいて座る殿田が、こちらに顔を上げながらいう。

「何が?」

「いやだから・・・沙奈ちゃんが・・・」

殿田がそこまで言ったとき、またしてもインターホンが鳴った。俺は気乗りしないまま、扉を開けにいき、開ける。

「やだなあお兄ちゃんったら、いきなり閉めるなんて。もしかして照れてるの?」

「・・・・・・・・・・」

ボタン。

ーピンポーン。

「ちょっとお兄ちゃん!何で閉めるの!?」

「・・・・・・・・・・」

ボタン。

ーピンポーン。

「ひぐっ・・・・・・・・ひどいよ、ひどいよお兄ちゃん・・・」

「・・・はあ。分かったから泣くなよ」

「だって・・・・・・・・だってえ・・・・・・・・」

気乗りしないままに扉を開け、開けては閉めるといふ動作を続け、そのたびにかかる言葉を無視していると、とうとう目の前の女

の子は泣き出してしまった。

泣き出したのは伊丹沙奈。中学3年生である俺の妹だ。とりあえず泣いている沙奈を家の中に入れる。

「殿田。何でコイツがいるんだ？」

お笑い番組を見て腹を抱えて笑っている殿田に俺は聞く。

「え？俺は知らねえよ。俺も家を出てみて驚いたぜ、お前んとこの扉の前に沙奈ちゃんが立ってたんだからさ」

「・・・そっか」

殿田は何もしてないか。

まあそれならそれでいいんだけどさ、何でコイツがここにいるんだ？

「お兄ちゃん・・・私のこと、嫌いな・・・？」

「いや・・・別に嫌いってワケじゃないけどさ」

「じゃあ何で追い払おうとしたの・・・？」

「だって。お前こそ、ここにいていいのか？」

「大丈夫。ちゃんと速水さんに許可もらってきたもん」

「・・・マジで？」

「うん」

泣きやんだ沙奈は俺の隣にちよこんと座り、俺の顔を覗きながら言う。

「……それで。何でお前はここに来たんだ？何の要だよ」

「え、ええ〜とね、そのお〜」

「お？どうしたんだ沙奈ちゃん？もじもじしちゃってえ〜」

「殿田さん！ほつといってください！」

「殿田、お前は少し黙っててくれ。ややこしくなる」

「へえ〜〜〜い」

間延びした返事を返した殿田は、視線をテレビに戻す。  
俺は沙奈と向かい合い、もう一度聞く。

「で？何でここに来たんだ？」

「その……お兄ちゃんがこっちに来たって聞いたから……」

「誰に聞いたんだ？」

「……お母さん」

「母さん、言うなって言ったのに。……うん、それで？」

「それでね。一緒に住もうと思って」

「は？」

「ぶふうっ!？」

思わぬ発言に間拔けな声を出してしまふ俺と、飲んでいたお茶を思いつきり噴出す殿田。おい汚いぞ、ちゃんと拭いとけよ。  
てか、そんなことより!

「どうしてそうなった!？」

「だって・・・寂しかったんだもん」

「いやいやいやいや!だからって何でそうなるんだよ!？」

「別にいいでしょ!」

逆ギレされた。

・・・とりあえず、風呂のほうも程よいくらいに湯が入りご飯も炊けたので、落ち着くこともかねて夕食を食べることにした。

俺と殿田は俺の作った豚肉のシヨウガ焼きとサラダ。沙奈はコンビニで買ってきたパンだった。

夕食を食べ終わると、殿田はいそいそと逃げるように自分の部屋へと帰っていった。

俺はというと、とりあえず先に風呂に入ることにした。いつもはシャワーで済ましているのにたまたま風呂をお湯を入れて時に来

たのはよかったというべきなのか、そうでないのか。

そんなかなで午後9時31分。

俺も沙奈も風呂に入り終え、一先ず落ち着いた。俺は沙奈にテールブル越しに向かい合い、話を切り出す。

「で？一緒に住むってどういうことなんだ？」

「うん、こっちに来たの私だけだったでしょ？寂しかったんだよ？」

「それは分かったから、それだけが理由じゃないだろ？」

「ううん、それだけ。帰っても誰もいないし、いつも1人だったから」

「.....」

「速水さんも許してくれたんだよ？むしろそうした方がいいって言われた」

「速水さんがねえ.....」

「うん、そのほうが仕事にも身が入るでしょって」

「仕事、ねえ.....」

俺の妹、伊丹沙奈はグループアイドルの1人だ。俺は今年になってこっちに来たが、確か沙奈は2年前？くらいからこっちに来ていたと思う。基本的に忙しかったらしく、帰ってくるのもあんまりなかったくらいだ。

ちなみに先ほどから話に出ている速水さんというのは、そのアイドルグループのマネージャーさんだ。

「その話、母さんには？」

「大丈夫、承諾済み」

「母さん・・・なんて事を・・・」

「ね、だからいいでしょ？ここに住んでも」

「でもこの家狭いし、布団1個しかないし」

「大丈夫、そのへんは考えてあるから」

「・・・・・・・・・・」

どうする？

このままじゃ俺の1人暮らしなのんびり平和な生活が崩壊する可能性が大だぞ？

だがコイツときたら小さい頃から結構面倒くさかったし、母さんに有ること無いこと言われたらどうなるか想像もつかない、いや、つくけどしたくない。

しかたない・・・か。

「分かったよ、ここに住んでいいよ」

「本当！？」

目を輝かせ、ぱあっと明るい笑顔になる沙奈。アイドルなだけに

顔が良いぶん、その辺の男なら一発で落とせるんじゃないか？それくらいに笑顔を輝かせていた。

「本当だから、それより今日は疲れたんだ。俺を寝かせてくれ」

「はあ〜い」

とりあえずテーブルを部屋の隅に立てかけ、布団をしく。それを終え、洗面所に向かい歯を磨き、寝る準備を終える。

「おい、何してるんだ？」

「ん？一緒に寝るんだよ？」

「は？何で？」

「だって布団、一枚しかないんでしょ？」

「お前の考えってそのことか？」

「もちろん」

自身ありげに沙奈は言う。

ほらな？ろくな事にならないだろ？

・・・まあだからといって布団から追い出して風邪でも引かせると、今度は速水さんに何されるか分かったもんじゃない。それに母さんから何かされそうで怖い。

俺は観念してしかたなく、本当にしかたなく一緒に寝ることになった。

「えへへ、お兄ちゃんと一緒にだ」

「うるさい、眠れないだろ」

「あ、ごめんなさい」

そういつて沙奈は布団に顔を沈め、黙り込む。よし、これで眠れそうだな。

と、思いきや。布団の隙間から何やら光が漏れていた。何だ？

「何してんの？」

「え？あ、メール」

「メール？」

「ほら、これ」

布団から顔を出し、何やら妙なものを突きつけてくる。

突き出された物体は小型カメラと同じくらいの大きさの、光る画面のついた妙な物体だった。

「何だそれ？」

「知らないの？iPhoneっていうまあケータイみたいなヤツだよ」

「ケータイ？ああ聞いたことはあるけど。あれって実在したの？」

「え、そんなことも知らなかったの？」

「・・・悪かったな」

俺の発言に、そんなにおもしろかったのか？と問いたくなるくらい沙奈に笑われた。

シヨツクだ・・・

「あはは、ごめんね。じゃあ今度お母さんに買ってもらえるように頼んでみるよ」

「そりゃどうも。ついでに布団ももう一つ買ってもらえ」

「ええ〜〜」

「いいな？」

「はい」

俺の言葉にやや不満まじりに答える沙奈。だがその様子は少し嬉しそうだった。まったく、こんなやりとりの何がそんなに嬉しいのか、俺にはさっぱりだ。

「じゃあ寝るぞ」

「あ、待って。まだメール送りきってないの」

「そ、じゃ先に寝るから」

「うん、おやすみ」

「おやすみ」

俺はそのiPhoneとやらが手に入ることにやや頬が緩んで  
るのを知れないため、沙奈に背を向けて眠りにつく。

しょうがないだろ！何だかんだいつでも嬉しいものは嬉しいんだ  
から……

第八話 日に干したあとの布団はどうしてあんなに気持ち良いんだろうか（後書

甲は妹には少し冷たいようです。

こんな小説でも読んでくれる皆様に感謝です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8212z/>

---

我らのHS部

2012年1月3日00時53分発行